

# Gの政治考



Gの政治考は  
公式サイトで更新中です。  
<http://gaun-yoshinao.com/>



2018.11.15

## 松本にとっての「あずさ」

松本で生まれ育った人間にとって、「あずさ」は、格別な思い入れがある列車だ。槍ヶ岳から流れ下る清流、梓川を名称の由来とする特急列車は、長い間、信州・松本を象徴する存在でもあった。その「あずさ」の座席と料金のシステムが、来春から大きく変わることになった。僕には、松本が分岐点に立つことを端的に表す出来事に映る。歴史を遡って考えてみたい。



新宿ー松本間で「あずさ」が運転を開始したのは、東海道新幹線が開通した翌々年の1966年。僕は、その3年前に松本駅のすぐ近くで生まれた。幼い頃は、駅のホームが見える場所に連れていってもらい、東京へ出発する列車を見送ることが楽しみだった。

当時、東京と長野県を結ぶ鉄道は、2つのルートがあった。上野から長野を通過して直江津に抜ける信越本線と、新宿から松本へ向かう中央東線だ。廃藩置県以来の因縁を引き摺って県庁所在地の長野市に何かと対抗意識を燃やす松本市の人間にとって、上野ではなく新宿と直結していることは、密やかな優越感の1つになっていた。

自分自身は、「あずさ」に乗る機会

がそれほど多かったわけではない。親子で旅行していた頃は、深緑とオレンジに彩られた急行「アルプス」に乗っていたし、金の無い大学時代は、普通列車を乗り継いで帰省していた。昭和の終わりには長野道が開通し、松本もモータリゼーションの時代を迎えていた。それでも、帰省や仕事でたびたび利用した「あずさ」は、ほどほどの料金で適度な利便性を与えてくれた。大きかったのは、実質的に3割引となる「あずさ回数券」の存在だった。

先月末に発表された、新たな座席と料金のシステムは、◇従来の自由席を廃止した上で、◇現在の指定席料金より数百円安い「座席未指定券」を発売し、◇座席の上に点灯するランプに従って空いている席に座れるようにする、となっている。(中略)

従来の自由席と「座席未指定券」の差額は松本ー新宿間で120円、これによってネット予約&チケットレスサービスの使い勝手が東海道新幹線や高速バス並みに良くなるのなら、悪い話ではないと感じる人も少なくないのではないかと。個人的には、僕もその1人だ。

ただ、見落とせないことが、2つある。1つは、松本のような地方都市は、首都圏に比べてインターネット対応やデジタル化が大きく遅れていることだ。特に行政サービスで顕著であるため、メリットよりもデメリットを感じる高齢者が多いと思う。これを機に、情報インフラのデジタル化を進めることが急務である。

もう1つ見落とせないのが、自由席を前提としている「あずさ回数券」が廃止になることだ。ほぼ3割引の料金で手に入り、松本が発着だからどの列車でも必ず座れる、松本市民にとって〈特別な制度〉だった。いつから始まったのかも定かでないほど長く市民の間に定着していた。他の地域の人からすれば、既得権益に見えるかもしれないが、中央本線の一部区間が今も単線のまま放置されていることを思えば、JRが設備投資をしない見返りとして暗黙のうちに続けてきたサービスと考えるのは、思い過ぎだろうか。

野中広務だったら、どうしただろうか、と思いを巡らせた。20年余り前、JR東海が京都に停車しない「のぞみ」を運行しようと計画した際に、京都選出の代議士だった野中さんは、「1便たりとも認めない」と周囲に公言し、結果的に名古屋から大阪へ直行する「のぞみ」の運行を阻止した。同じ頃に賛否両論を巻き起こしていた近未来的な京都駅ビルの建設も実現し、以来、京都は、国際観光都市として繁栄が続いている。

金沢まで延伸した長野経由の北陸新幹線と、2027年に開通する飯田経由のリニア中央新幹線に挟まれ、松本が誇りとしてきた「あずさ」の未来は、危うさを孕んでいる。そうであればこそ、今回のような動きに、松本の有力者はいち早く敏感であらねばならない、と僕は思う。



vol.10

謹賀新年

Lの視点で、Gの時代を穿つ

## G通信

臥雲義尚 × リポート

臥雲は日々何を考え、活動しているのか。その横顔と頭の中を覗けるニュースレターです。

## ポスト平成を担う、ジセダイの松本へ

平成という時代が終わろうとしています。時代の節目、とりわけ30年という長さが一世代の期間と重なった平成の終わりは、私たちの来し方行く末を問い直す絶好の機会だと思います。

この30年の間に、日本を取り巻く環境で主役が交代したり形成が逆転したりベクトルが変化したりしたことは、枚挙にいとまがありません。◇情報の伝達手段の主役は、電話や電波からインターネットに代わりました。◇アジアの経済大国の座は、日本から中国へ移りました。◇男性稼ぎ主モデルが常識とされた日本の家庭は、夫婦共働きが多数を占める状況に変わりました。

平成という時代を象徴する最も根源的な変化は、人口の増加から減少への転換です。これに伴って、大きさや画一性よりスピードや多様性が、富や価値を生み出す尺度になりました。政治体制を見れば、明治維新以来の中央集権型国家の限界が露呈して、分権型の政治が必要とされる時代を迎えています。

ポスト平成の時代に、松本市は、2番手3番手に甘んじることなく、最先端の都市を目指すべきです。包括医療、医薬開発、松本城観光、山岳リゾート、幼児教育、音楽文化。こうした分野の恵まれた環境を最大限生かすために、交通インフラ、情報技術、市役所のあり方を根本から見直す必要があります。

3年前の市長選挙に敗れて以降、「ジセダイ」という言葉にこだわって活動を続けてきました。次の世代に共感を広げたい、次の世代を育てていきたいと考えたからです。敢えてカタカナで表記したのは、実年齢を超えて新しい感性や発想を持つ人や時代を表現したいという思いを込めています。

現市長が「健康寿命延伸都市」づくりの総仕上げと位置づける4期目の任期も残り1年余り。自分の政治活動をマラソンに喩えるなら、30キロ地点を越えて、これから勝負所に差し掛かります。新たに「中枢中核都市」に選ばれたことも起爆剤として、ジセダイの松本へ向けてピッチを上げていきます。

### 編集後記

新年、あけましておめでとうございます。平成を締めくくる昨年の漢字は「災」でした。相次ぐ自然災害に苦しめられ、振り返ると、平成という時代は、そこに込められた意味とは裏腹に、多難の時代でした。しかし、苦あれば楽あり。新たな時代が幕を開けます。心機一転、災い転じて「福」となす。良い年となりますよう。本年もよろしくお願い致します。(くり)

臥雲の会 事務局  
〒390-0811  
長野県松本市中央1丁目2-24  
電話 0263-36-7343  
Fax 0263-50-6727  
E-mail info@gaun-y.com

臥雲義尚



“ 地元の球団で「超一流になる」  
という目標へ駆け上がってほしい ”  
(根尾昂選手を中日が1位指名)

日々更新中 /

## 臥雲の日常と横顔



Facebook



### 10月~12月 主な投稿記事

10/17 18歳超の障害者学校を見学

10/18 外堀復元中止説明会で紛糾 a

10/20 波田住民で賑わう病院祭 b

10/22 起業家表彰のイベントに触発

10/24 浅間温泉の空き家調査に同行

10/28 少女野球教室に日本代表招く c

10/28 自転車レーン塗り替えに参加 d

11/ 9 空き教室で小学生と将棋対決

11/17 大盛況の新そば祭りで受付係

11/22 ボランティア日本語教室を見学

12/ 9 山雅優勝パレードに老若男女 e

12/10 市議会の一般質問は議論不足

12/13 市役所防犯カメラに賛否両論

12/22 松原の時計台に一夜限り電飾



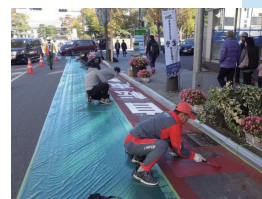
a



b



c



d



e

最初から最後まで厳しい批判や怒りの声が噴出しました。こうした光景は、松本に戻ってから初めて目にしました。(中略) 昨夜の説明会では、さまざまな角度から疑問がぶつけられましたが、大きな焦点は「将来的に復元を目指すのか」ということ。これに対する担当職員の説明は、「除去費用を行政が支出することは便宜供与になってしまう」として、「現時点で言えることは、引き続き用地取得を進めて平面整備を行うということ。『将来的には掘ります』ということとは言えない」。(中略) 出席者の多くの指摘したことは、なぜ市長本人が出てきて答弁しないのか、ということでした。僕自身も担当者レベルの説明を2時間近く聞いても、肝心なところが腑に落ちませんでした。

松本JCが主催した、大名町の自転車専用レーン塗り替え作業「#松本がいいね」。えんじ色のペンキを路面に重ね塗りするのは、なぜか心地よくて、ウキウキしながらローラーを動かしました。隣りのスペースを塗っていた小さな女の子も、楽しそうだったなあ。「松本を自転車で快適に走れる街にしたい」という思いが強まりました。人口が減少し歳出の抑制が求められる時代の公共事業のあり方にも、思いを巡らせました。

松本山雅、J2優勝パレード。老いも若さも大人も子ども、反町監督や選手たちと喜びを分かち合おうと松本のメインストリートを埋め尽くした。すぐ近くで観ていたおじいちゃんとおばあちゃんの会話に耳をそばだてていたら、こちらまで嬉しくなった。

### 地区ごとに「車座トーク」開催

昨年の秋より、波田・梓川・安曇3地区合同、里山辺地区、庄内地区で、車座の懇談会を開催しています。地区幹事の呼びかけで集まっていた支援者の皆さんから、それぞれの地区が抱える課題や要望を聞いてざくばらんに意見を交わす、たいへん有意義な機会になっています。地元に対する熱い思いに触れ、大いなる刺激と激励をいただき、感謝いたします。年が明けて以降、一層精力的に活動し、35全ての地区に足を運びたいと思いますので、どうぞよろしくお願ひします。



10/24

### 「松本の街を元気にしたい」 ～サマフェスから山雅まで～



第21回のゲストは、崖の湯薬師平茜宿の4代目で、<松本のワクワク>を仕掛ける山村和永さんでした。花時計公園で開催される「信州ワインサミット」と「松本サマーフェス」は、いずれも本物にこだわる飲食イベントとして松本の風物詩になっています。“山雅やイベントはまちづくりの起爆剤”と語り、当事者意識を持ってまちづくりに関わる人を、同時に育ててきました。おらが街のプロデューサーは、「松本をもっと元気にしたい」と活動を続けています。

11/29

### 「外国人と共生する街へ」 ～日本語教育から介護現場まで～

第22回は、NPO法人多文化共生ネットワークの日本語教育アドバイザー、佐藤佳子さんを迎え、松本で外国人住民と共生するために必要なことは何かを考えました。外国から来た人たちが幸せに暮らしていくには、日本語で交流する機会を増やすことが求められますが、教師もボランティアも不足しているとのこと。関連する法案の審議で関心が高まる中、介護、農業、建設、司法など様々な分野の幅広い年齢層の方々からご参加をいただき、活発に意見が交わされました。



佐藤佳子さんは、日本語教育のエキスパートです。松本に住む外国人が日本語を学ぶ環境について、詳しく解説してもらいました。外国人介護士の受け入れを見据え、自ら介護現場で働き、日本語教育を充実させようとしている佐藤さんの話には、説得力と納得感がありました。外国人に選ばれる街になる。松本が目指すべきビジョンだと思います。

次代を  
に  
な  
う 若者×臥雲

## ジセダイと語る 松本のプライド

ジセダイトーク

臥雲の Facebook コメントより

良質な飲食イベントやプロサッカーチームを松本の<光>に育て、真の『観光』都市を作っていこう。そして、国内外から人を呼び寄せ、人口減少社会を支える原資を稼いでいく。同時に、世代交代が否応なく進む街の新たな担い手を作っていきたい。自ら積み重ねてきた運営ノウハウや経験談を余すことなく披露して、山村流の街づくり論を語ってくれました。

### ジセダイトーク 信毎メディアガーデンで再起動



20回の節目を迎えたジセダイトーク。昨年4月に中心市街地の情報発信・交流の拠点としてオープンした話題のスポット「信毎メディアガーデン」に会場を移し、装い新たに開催しています。会場の3階のスタジオは、幅広い世代の50人を超える参加者で、毎回満席です。松本城の外堀復元中止や市庁舎の建て替え問題など、いま、松本の街づくりは岐路に立っています。参加者の皆さんと、ホットなテーマで多事争論し、「様々な意見がバンバン出る街」にしていきたいと思っています。